

願いの魔法

Power is Law

赤い死神

目次

プロローグ 弱肉強食

第一章 繰り返された悲劇

第二章 五里霧中

1

2

10

プロローグ 弱肉強食

「……本当にそのような者をお使いになるのですか？」

事務的な口調に、ほんの少しの嫌悪感を交じらせながら、執務室の机に座り書類に目を通す青年に問いかける。年若くも、この魔法帝国日本において誰よりも強大な力を持った魔法使いに。

「お前は反対か？」

紙の束から顔を上げた青年の目が真っ直ぐに自分を見る。その眼差しに晒されると、自然と頬が上気してしまう。

「いえ、あなたの決めたことに反対など……」

自然、返す言葉も尻すぼみになってしまふ。青年はそんな自分を見て笑みを浮かべた。

「奴には力があり、利用するだけの価値がある。あれだけの力、牢獄の中で腐らせるのはもったいないだろう」

自分を見る瞳に揺らぎは全くない。

青年が起用した人物が過去に何をし、牢獄に収監されることになったのか、自分も、そしてもちろん青年も知っている。

二人の人間を殺し、一人の少女を誘拐したあげく、研究と称してその少女の自由どころか意志までも奪い取った研究者。

「しかし、あのような者をお側においては、あなたの品位が貶められます」

「品位などいくらでも貶めればいい。振る舞いだけで他者を従わせることなどできないのだからな」

「ですが、協力の見返りに少女の誘拐を手助けしろなどと……」

「迫り来る危機を拒むというのなら、自身の力で打開すればいいだけのことだ」

無情とも言える言葉。

しかし、青年の目に濁りも澱みもない。

「それが出来ない弱者は、弱者らしく強者の元にひれ伏せばいい。弱者は力のある者に従うことが義務なのだからな」

弱肉強食。

それが青年の唱える主張。

唯一にして絶対の価値観。

完全なる実力主義。

日本のみが持つ、世界中のあらゆる兵器よりも強力な魔法という力。

そしてその中でも、最強と謳われるほど強大な力を持った青年の矛は、

突き立てる先を求めて、彷徨つ……

その牙が獲物を仕留めるその時まで。

第一章 繰り返された悲劇

「なんで、テメエがここにいやがる……」

部屋に空けられた大穴から飛び降り、その男と対峙した俊介が問う。

「久しぶりだね、少年」

男はまるで旧知の仲であるかのように軽々しく、平然と言い放つ。

「まるでいつそやの焼き直しのようだね」

男の脇に抱きかかえられた千里。その男の前に立ち塞がる俊介。

思い出したくもない昔の記憶。

不愉快極まりないが、唯一の救いは両親が仕事で家を留守にしていることか。

「テメエ……」

短めの髪に、済ました目を映す片眼鏡。少し埃で汚れた白衣に身を包んだその男の姿を、俊介はよく知っていた。忘れられるはずもなかった。

かつて千里を誘拐した男、ガイル・アーベルの姿を。

「なんでテメエがここにいやがるんだよ。テメエは警察に捕まっただけだろっが」

他にもない俊介が友人達と協力してガイルを倒し、警察へと引き渡した。本来なら今は、刑務所に収監されているはずだ。

……なのに何故ここにガイルがいる？

「そんなことは決まっているだろう？ 研究を再開するために貴重な千里を回収に来たんだよ」

「答えになってねえんだよ」

「まあいいじゃないか、そんなことはどうでも。重要なのは、どうして私がここにいるかではないだろう、少年」

気絶させられたのか、千里は長い黒髪を地面に向けて垂らしたままピクリとも動かない。それを俊介に見せつけるかのように抱え上げ、挑発気味にガイルが言った。

「ッ……ああ、そうだな」

確かにそうだ。

ガイルの言う通り、どんな手段で刑務所から出て今ここにいるのか。……そんなことはどうだっていい。

今一番重要なことは、ただ一つだけだ。

「今すぐ千里を離しやがれ！」

「断るに決まっているだろう」

「だったら、力づくで取り返す！ 来い！ 流シューティングスター 星リバーズスター 逆リバーズスター 月！」

呼びかけに心えて、俊介の魔術媒介である二丁のリボルバーが白銀に輝く。

二丁の銃に魔力で作った弾丸を打ち出す、それが魔法使いとしての俊介の基本スタイルだ。

「おやおや、いいのかい？ そんな武器を持ちだして。千里に当たったらどうするつもりだい？」

「そんなへマはしねえよ。きつちりテメエだけ撃ち抜いてやる」

撃鉄が落とされシンダーが僅かに回転する。空だったはずの弾倉から光の弾丸が生まれ、銃口を抜けてガイルへと向かって打ち出された。

銃弾と、それが打ち出される光景を想像し、魔力を使って具現化する。それが俊介の魔法だ。

「相変わらず喧嘩早いな、少年」

呆れたような声でそう言って、ガイルは飛んでくる弾丸に向けて火球を放つが、俊介の弾丸はそれを貫いてガイルへと迫る。

「おっと。危ない危ない」

しかしそれをガイルは横つ飛びに避けて笑う。

「さすがに、荷物を背負った上に媒介もなしでは分が悪いね」

「だつたらさつさと千里を離しやがれ！」

「そうはいかんさ。これを手放したら研究が先に進まない」

「テメエの都合で千里を振り回すんじゃない」

銃をホルスターに収め、駆け出す俊介。魔力を込めて強化した右手を振りかぶり、ガイルめがけて振り下ろす。ガイルは避ける素振りを見せず、俊介の拳はガイルの顔を捉える。

だが、

「なっ……」

ガイルの脳を揺さぶるはずだったその一撃は、突然割って入ってきた黒服の男に難なく受け止められる。

「随分と遅いご到着じゃないか」

笑いながら、ガイルは黒服の男に向けてそう口にする。それに対して男は何も答えずに黙ったまま、俊介の方だけを見ていた。

「おやおや、嫌われたものだね」

「……………早く行け」

肩をすくめるガイルに、男は短くそう口にする。

「ああ、そうさせてもらうよ。では少年、生きていればまた会おうか」

千里を抱えたままのガイルが俊介に背を向けて一歩踏み出す。……が、何を思ったのかそこで足を止めて、俊介の方を再び振り返った。

「そうそう、折角の再会だ。記念に一つだけ……そう、先程の質問に答えておこうか、少年。どうして私がここにいるのか。正確には、どうして刑務所に収監されたはずの私が、こんなところにいるか、だね。その答えは簡単さ、ある人物が私を牢獄から出してくれたからだ」

「出してくれた……だと？」

当たり前的事だが、刑務所とは犯罪者を隔離する施設だ。一度入ってしまうと、刑期が終わるまで簡単に抜け出せる場所ではない。ましてや、誰かが頼んだからと言って易々と出てこられる場所でもない。

「でたらめ言うてんじゃない！　んなこと、できるわけが」

「では、どうして私はここにいるんだい？」

こちらを馬鹿にするようにニヤニヤと笑いながらガイルが訊ねてくる。それを言われてしまえば返す言葉がない。

俊介の常識では刑務所から出る事は簡単な事ではない。だが、実際に今ここにガイルがいるということは、それを成し得たと言う事になる。ガイルの言葉によれば、ガイルは

外の誰かがなんらかの方法を用いて。

「……一体どこのどいつだ！ テメエ見てえなクソ野郎を牢獄から出したって奴は！」

「君の友人、確か藤原レイと名乗ってかな？」

「ざけんな！ レイがんなことするわけないだろうが！」

友の名が出た瞬間それを否定した俊介を、ガイルは苦笑する。

「話は最後まで聞きたまえよ。私を牢獄からだしてくれたのは彼ではない、彼の兄君だよ」

「兄貴……？」

レイに兄がいるなどと言う話は、今日まで聞いた事がない。

クラスメイトであり、友人であるが、俊介はレイの事をあまり知らない。正確に言えば、学園で会う藤原レイの姿しか知らない。

レイの家の事も、家族の事も。兄がいるなど、俊介は聞いた事もなかった。

「おや、知らなかったのかね？ 彼には一人兄がいるということ。彼とは友人関係であつたように思えたから、すでに彼の家のこともすでに知っていると思っていたが」

「別にあいつの家がどんなだろうと、オレの知った事じゃねえんだよ」

「それは結構な事だが、彼の兄が私を刑務所から出させたとなれば、少しは興味が沸くんじゃないのかね？」

気にならないと言えば嘘になるが、誰がどうやってガイルを刑務所から出したか、よりも今日の前にガイルがいるという事の方が重要だ。

「まあいい。いちいち説明する義務も特にはないからね。ともかく、私は彼の兄に魔法使いとしての私の力が欲しいと言われたのだよ。協力するなら刑務所から出してやるつと言われた。無論、私はその申し出を受けたよ。ただし、条件をもう一つ付け足した。その条件というのが、これだよ」

もう一度、ガイルは勝ち誇るように抱きかかえた千里を俊介に見せつける。

「研究のための千里を回収する事。そして、その契約実行のために私の護衛として遣わされたのがその彼というわけだ」

俊介の前に立つ黒髪をオールバックにした初老の男性は、その言葉に対して肯定も否定もしない。だが、この場での沈黙が答えを語っているのと同じだ。

ガイルの方も一度俊介と交戦しているからわかっていたのだろう。千里を攫いに来れば、必ず俊介が邪魔をするだろう事を。そのための護衛が、その黒服の男ということなのだろう。

「さて、話はこれぐらいでいいかな？ それでは、彼によく伝えておいてくれ。兄君に世話になったとね」

「待てー」

背中を向けて歩き出したガイル。それを追いかかけようとして、

「……」

立ち塞がる男に足を止めさせられる。

「そこをどけー」

「……君命だ。あの男がこの場を離れるまで貴殿を通すわけにはいかん」

男は淡々とそう答える。先程のガイルとのやり取りを見た限り、ガイルの事をよく思っていないようだったが、この場を通すつもりはないらしい。

「通りたけりや、力ずくって事がよ……来い、エクスカリバー！」

口で言って退くようには見えない。そう判断して、俊介はホルスターから引き抜いた二丁の銃を重ねる。俊介の魔力を受けた二丁の銃は、目映いばかりの閃光を発しながら白銀に輝く一振り of 剣へと姿を変えた。

「……戦つ気か？」

「テムエがそこを退くってんなら何もしねえ！ けど、立ち塞がるってんなら容赦はしねえ！」

「それはこちらも同じだ。ここで引き下がるといふのなら、こちらからは危害を加えない。……おとなしく引く気はないか？」

「あるわけねえだろ！」

これが返事だと言わんばかりに俊介は男に向かってエクスカリバーを振り下ろす。その一撃に、男は避ける素振りもなくただ一言呟く。

「……致し方あるまい」

そう言っ、振り下ろされたエクスカリバーを片手で受け止める。

「なっ」

驚きの声を上げるよりも先に、男の拳が俊介の腹部を打つ。

「がはっ……あ……はっ……はあっ……はあっ……」

痛み表情を歪めながら、一息で呼吸を整えて反撃に出る。だが、薙ぎ払ったその先に男の姿はなく、代わりに俊介の視界一杯に男の拳が映る。

「ぐあっ……くっ……」

気付いた時には遅く、俊介の体が反射的に顔を守ろうとするが、それも間に合わない。鈍痛が俊介の意識を揺らす。

同時に、嫌な音が耳に届いた。鼻骨が折れたのか、口元に血の這う嫌な感触が伝わってくる。

視界が一瞬暗くなり、体がふらつく。たった二発殴られただけでこの様だ。……いや、俊介が反応できないほどの速さを持った拳を一発も叩き込まれたのだから当然の結果とも言えるか。

「力の差は理解できただろう。諦める」

悠然と俊介の前に立ちはだかる男が言う。

「諦めろって……何をだよ？」

朦朧とする意識でそう問い返す。

「あの少女は、我が主君のための犠牲となるのだ。貴殿がいくら足掻いた所でもうあの少女が戻ってくることはない。だから、引き下されむっ」

油断していたのだろう。俊介の放った斬撃は先程のように刀身を掴まれることなく右腕で受け止められる。魔法で強化されていたのだろう男の腕が切り落とされる事はなく、薄皮一枚と服を斬っただけに終わった。

「まだ抵抗する力があるか……大したものだ。しかし、今の一撃で限界のはずだ」

「……あんま舐めた事言ってんじゃねえぞ、オッサン！」

「むっ」

繰り出される二撃目を察知して後退する男。ふんばりが効かず、空を切った刃はそのまま地面に突き刺さる。

「オレはまだやれんだよ……さっさとテメエをぶっ飛ばして、あのクソ野郎を追いかけなきゃなんねーんだよ」

ふらつく足を叱咤しながら、俊介はエクスカリバーを正眼に構え、闘志の籠もった目で男を見る。

「まだやるつもりか……そんなにあの少女が大事か？」

「大事かだと……？ なんもん、大事に決まってるだろうが！ 自分の家族を攫われて、おとなしくしてる奴がどこにいるってんだよ！」

「そうか……そうだな。貴殿の言葉は正しい。貴殿の怒りは当然だ。だが……」

男の姿が視界の中から消える。

「貴殿にとってあの少女が大事であるように、私にとって君命は絶対だ」

網膜から男の残像が消えるよりも先に、男の拳は俊介の胸部を打った。

吹き飛ばされ、家の壁に叩きつけられた俊介は力なく倒れる。ヒビの入った壁にもたれることなく、前のめりに。

「くそっ……」

手にも足にも力が入らない。立つどころか起き上がることすらままならない。

「貴殿はよく戦った。己を卑下する必要はない」

倒れた俊介を見下ろしながら男が言う。勝ち誇るわけでもなく、ただ淡々と。

「もう眠れ。これ以上、自分を痛めつける必要はない。力の差が覆らないことはわかったはずだ」

「まだだ……まだ、オレは……」

「無駄だ。これ以上、貴殿に出来ることはない」

「ここで……引き下がる事なんてできるかよ……」

ようやく、千里は帰ってこられたんだ。

「昔から……決めてんだよ……」

俊介達が当たり前にいられるこの世界に。

「あいつは……オレが守るんだよ……」

やっと千里は自分の世界を取り戻せた。

だから、

「絶対に、あいつをあんな奴の所に行かせない。行かせてたまるか」

指先を動かすことは出来ても腕に力が入らない。

動くことはおるか立ち上がることすら満足に出来ない。

だが、俊介は魔法使いだ。

例え歩けずとも、まだ、戦える。

「オレに宿る光の力よ……オレの呼びかけに応え、その力を見せてみる……！」

「これは……まさか……」

「オレの敵は目の前だ……お前の敵は目の前だ……ぶっ潰せ……ぶっ壊せ……」

「くっ」

俊介の呟きの意味を知った男が、防御態勢に移る。

急速に練り上げられた俊介の魔力が、魔法という形を取り損ねた魔力の余波が、光と
なって辺りを照らす。

「落ちる……」

通常の魔法とは違う、詠唱という決められたルールに従って発言させる、ハイマジック高位魔法。

その発言に必要な最後の文言を、その名を、叫ぶ。

「……聖なる雷！」

しゅんすけ俊介の魔力が光の槍を形どる。

その槍は真っ直ぐに、防御態勢を取っている男に向かって放たれる。

極限まで高められた光の魔法が、男の姿を呑み込んで輝く。

しゅんすけ俊介はその光景を見ながら、ゆっくりと意識を闇の中へと落とし去った……

* * *

綺麗に磨かれた石材で作られた部屋。執務用に宛がわれた臙脂色の机の上に書類を置き、青年は肘掛けの着いた革張りの椅子に背中を預ける。

屋敷……というより、異国で言う宮殿に近いデザインをされた建物の中になれば、この部屋の光景はおかしなものではないだろう。日本の建築物としては異質であるが、別段建築様式にこだわりがあるわけでもなく、この宮殿や執務室自体に文句はない。

古い時代と日本の文化に誇りを持ってきた老人達からすれば面白くないことだろうが、青年にとっては利便性に問題がなければ他は些事であった。

その部屋の入り口である重厚な木製のドアが叩かれたのは、窓から見える夕焼けが今にも沈もうかと言っ頃だった。

「入れ」

席を立つことなく、座ったままでその口にする。程なくして扉が開き、一人の男が室内へと入ってくる。

「首尾はどうだ」

片眼鏡を掛けたその男の名はガイル・アーベル。つい先日、青年が刑務所から特例で出所させた男だ。

「無事確保できたよ」

ガイルは上機嫌に笑いながらそう報告する。

「お前の希望は叶えてやった。これからは私のために働いてもらう。異論はないな」

「それはもちろん。約束通り貴方に仕えさせていただきます。しかし、よろしいので？ 私のようなものを側に置いて。いらぬ声があがるやもしれませんよ」

上機嫌に笑いながら口にされた言葉を、青年は一蹴する。

「そのような些事に興味はない。私に刃向かう者がいるというのなら、叩き潰せばいいだけだ」

「これは頼もしい」

「無論、お前が私にとって有益な人材である間だけの話だ。私はお前の魔法使いとしての力を買って側に置いたのだ。私の期待を裏切るようなことであれば、お前の価値はなくなることを忘れるな」

「言われずとも理解しておりますよ」

「ならばいい。下がれ」

「では失礼」

顔に貼り付いた笑みを崩さぬまま頭を下げて、ガイルは部屋を出て行く。例の研究素材とやらを手に入れたことがよっぽど嬉しかったのだろう。足取り軽く向かう先は恐らく、研究室にと用意してやった一室か。

「まあ……好きにすればいい」

来るべき時に働いてさえくれれば、後は何をしようと思つたことではない。

信頼できる人間とは言わないが、少なくとも与えてやった餌に飽きるまでは協力を続けるだろう。

そんなことを考えていると、不意にまた扉がノックされる。

「入れ」

「はっ」

今度の来客は自分に長く仕えてくれている初老の男だった。

「戻つたか、源道」

名を不破源道。幼少の頃から今まで、自分の護衛として仕えてきた男だ。自分を主君と定め、命令に異を唱えることなく行動する。魔法使いとしての実力はもとより、その忠義さ故に自分がもつとも信頼している人物だ。

「報告か？」

「はっ。ガイル・アーベルの護衛の任、完遂しました故、報告に上がりました」

「わざわざご苦労。あの男からも聞いている。些事に時間を取らせたな」

「いえ、それが君命であるのなら、私はどのような任も承りましょう」

「相も変わらず硬い男だな。が、私はお前のその忠義を買っている。これからも私に尽くしてくれ」

「はっ」

「……ところで、右腕のそれはなんだ？」

いつも通りきつちりと着こなした黒服の袖口から、白い包帯が見える。ここを出る前にそんなものはなかったはずだ。だとすれば、出先で怪我をしたということか。

「あの男が回収してきた女が抵抗でもしたか？」

「いえ、あの少女は抵抗する間もなくあの男によって確保されました」

「では誰が？」

「彼女の親類とおぼしき少年に」

「ほう……それは興味深い話だな。詳しく話せ」

源道はこの国でもトップクラスの魔法使いだ。その源道に手傷を負わせるなど、並の魔法使いにできることではない。自分の目の届かぬ所にそんな逸材が眠っていたことに驚くと同時に興味が沸いてくる。

背もたれから体を起こして源道の話聞く。脚色なく、あつたことをありのままに話させた後、青年は満足そうに体を再び椅子に預けた。

「アーレント魔法学園の学生か」

「あの男の口ぶりからすると、レオナルド様とも交友があるようです」

「レオナルドと？　そう言えば先日レオナルドが学園で騒ぎを起こしたという報告を受けていたな」

確か学園内で私闘に及んだという話だったはずだ。

あるいは、その相手が源道の言う少年かもしれない。だとすれば、なおのこと興味深

い。

「いい人材が育っているようだな。結構な事だ」

これから先、日本は生まれ変わる。

そのためには、その少年のような強い魔法使いが必要なからだ。

「その少年の事、胸に留めておこう」

まだ学生の身でありながら、源道に傷を負わせるほどの使い手。

果たして魔法使いとして成長した時に、一体どれだけの力を有しているのか。

「奴にあの女をくれてやるのは少々もったいなかったやもしれんな」

青年の言葉に、源道はビクリとも表情を変えない。

自分に対する忠誠は確かだが、今回の命令に納得はしていないのだろう。

だが、源道は私を滅し、公に尽くす人間だ。例え不服に思っているとしても、それを口に出

す事はない。

「ご苦労だったな、源道。今日はもう下がって休め」

「はっ。では失礼させていただきます」

部屋を退出する源道を見送って、青年は体を椅子に預けたまま考えを巡らせる。

これで自分の直属の部下として、四人の魔法使いが集まった。

いずれも劣らぬ使い手揃い。

準備は着々と進んでいる。

「ぬるま湯の平穩は、直に終わる」

そして、

「その時が、新たな時代の幕開けだ」

第一章 五里霧中

視界の中を白一色で埋められた世界。

目に移る範囲にその世界の端はなく、果てなどないかのように白だけが延々と広がる世界。

そんな世界に、俊介しゅんすけは一人ぼつんと立っていた。

（ここは……確か……）

この場所には覚えがある。

あれは、いつだったか……

（そうだ……オレはここで、あいつらと……）

「目覚めよ」

思考の途中でいつかと同じく声をかけられる。耳ではなく数多の中に直接響いてくる声。

「流シューティングスター 星と逆リバースムーン 月か……いや、どっちでもないんだっけか……」

元々覚えのよくない頭である上に、今は霞が掛かったように意識もハッキリしない。朦朧とする頭は自分の状態すら把握できない。立っているのか座っているのか、それとも寝ているのか。

「そうだ……確か、ここは精神世界とか言ってたな……」

「そうだ。ここは主の精神世界だ」

「で……？ オレはなんでこんな所にいるんだ？ いや、いるでいいのか？」

「それは主が力を使い果たして倒れてしまったからだ」

「力を使い果たしたって……」

「何だろつか……何か、引っかかる。」

「……そうだ、オレは……」

千里を……

「千里ちとせっ！」

目を開いたのと、体を起こしたのはほぼ同時だった。

一瞬だけ真っ白い天井が映ったかと思えば、起き上がった体の真正面に薄黄色のカーテンが見えた。

「どこだ……ここは……ッ!？」

次の瞬間、目の前が一瞬真っ暗になって体が横向きに倒れる。

「何だ……これ……」

体中に力が入らない。指一本動かすことすら重労働に感じる。

「これ……前にも……」

この感覚は前にも一度経験したことがある。

五月に学園で行なわれたバトルロイヤルにおいて、三年生の西風正人にしかぜまさとと戦った時と同じ。ほとんどの魔力を使い果たしてしまっただけで、体が思うように動かせない。あの時に比べれば幾分マシだが、それでも高位魔法ハイマジックを使った代償は大きいらしい。

「クソッ……」

体を動かすことは出来なくても、意識の方は次第にハッキリしてくる。……と、同時にあの男に殴られた箇所が悲鳴を上げ始めた。特に骨を折られた鼻が酷い。まかり間違ってもどこかにぶつけようものなら、あまり痛みに意識が飛ぶかもしれない。

「あの野郎……何者だ」

言い訳もできないほどの圧倒的な敗北。

今まで対峙した相手とは比較にならないほどの強さ。俊介が今まで対峙してきた中でも、一番目に位置する強さだった。

いつもの俊介であれば、敗北の悔しさを覚えている所だが……千里が攫われた今、そんな感傷に浸っている暇はない。

気持ちに急かされるまま体を起こそうとする……が、

「くっ……なんだ……」

体が全く言う事を聞いてくれない。かろつじて体を起こす事はできたものの、起き上がった体を支えることが出来ず、体が横向きに倒れる。

「起きろよ……このっ……」

何度試してみても上手く体を起こすことは出来ない。それすら満足に出来ないのだ。立ち上がった歩くことなど出来るわけがない。このベッドを抜け出して、千里を助けに行くことなどできるわけがない。

だが……

「起きろよ……起きてくれよ……」

ジツとなどしていられるはずがない。

俊介は知っている。

ガイルが千里に何をしてきたのか。

研究と称して千里に何を強いたのか。

自分の家族が、

大切な幼馴染みが、

好きになった女の子が、

再びそんな目に合うことを、許せずはできなかった。

だから、言うことを聞かない……いや、俊介の意志に従って、限界まで戦ってくれた体に、まだ、鞭を入れ続ける。

頭の片隅で、無駄だと気付いていながら……それでも……

「俊介!!? 何やってるの!?!」

「母……さん」

不意にカーテンが開いて、見慣れた母の姿が仕切られた部屋の中に入ってくる。

「あんたって子は……また無茶して……」

「ここ……病院か……?」

看護師の格好をしている母の姿を見て、ようやく自分のいる場所がどこなのかを理解する。

「何で病院に……?」

「近所の人がここに連絡してくれたからよ。何があったかはわからないって言ってたけど……」

ガイルが大きな音を立てて壁を壊していたし、自分もさんざん声を荒げていた。それに

加えてあの高位魔法だ。あれだけの光量を発していれば、嫌が応にも目立つというものだ。千里と目の前の男に気を取られていたせいで気付かなかったが、誰かがあの戦いを見ていたとしても不思議ではない。

「それで、何があったの？　うちが大変なことになってるってお父さんが」

「……親父が？」

「警察の方に連絡があったのよ。それで、あんたが起きたら事情を聞くって、外で待つてるわ。……心配なら心配だって言えばいいのよね」

「母さん……」

「どうしたの？」

「千里は？」

「……」

返答は沈黙。何よりも雄弁だ。

「……親父を、今すぐここに呼んでくれ」

「でも、俊介、あんた、体が……」

「いいから」

満足に起きあがることすら出来ない体で吠える。

「……わかったわ。でも、無理しちゃ駄目よ」

俊介の目を見て小さくため息をついた後、母はカーテンを開けて外へと出て行く。床を叩く音が病室に響いて、少しして扉がスライドする音が聞こえた。それから少しして、足音がこちらに近づいてくる。

「大丈夫か？」

ベッドの脇に置いてある椅子に座り訊ねてくる。刑事として事件の当事者に言葉を掛けるより先に、親として子供に言葉が掛けられる。だが、今の俊介にその氣遣いを気に留める余裕などなかった。

「……どういふことだよ」

開口一番で問いかける。

「何であいつがあんな所にいたんだよ」

千里が攫われたこと……その相手。

ガイル・アーベル。

俊介にとって最も憎むべき男。

あの男があの場合にいられたのは……レイの兄が刑務所を出所させたからだと言っていた。

脱獄でないというならそれは、警察が犯罪者であるガイルの出所を容認したと言つてい

と。

その結果、千里は攫われた。

これを……許すことが出来るか？

出来るわけがない。

「落ち着け、俊介。あいつとは誰のことなんだ？　一体何があったのか、まず話してく

れ」

「ガイルの野郎に決まってるだろ」

怒りの感情が頭に回ると、今まで感じていた疲労感はどこかに言ってしまったか、次第

に声が大きく荒くなっていく。

「ガイル……？ ガイル・アーベルのことか?! どういうことだ、何故あの男が……」

「オレがそれを聞いてんだよ！ 何であんな奴が出てこられるんだよ！」

もしも体が満足に動いたら、父親に掴みかかっていただろう。今この場に、その理不尽をぶつけられる相手は他にいないから。

「警察は犯罪者を捕まえる組織じゃねえのかよ！ 何であの野郎を……！」

「俊介。それは、確かな話なのか。あの男は確かに……」

「じゃあ千里はどこに行っちゃったんだよ！」

この場には千里の名を出されて、父親は言葉を嚙む。ガイルが千里に妄執を持っていたことは、俊介だけでなく家族全員が知っている。

「……俊介、あったことを一から順番に話せ」

「んなことしてる場合かよ！ 千里はあいつに」

「俊介！」

叱責されて、今度は俊介が口を嚙む。

「あの男のことは後で確認する。だから今は、何があったのか正確に教えてくれ。千里を助けたいんだろっ！」

「……わかったよ」

父親に促されるまま、不承不承に俊介は口を開いた。

少し用事が出来て千里と別々に帰ることになったこと。

俊介が家に帰った時には、千里がガイルに捕まっていたこと。

そしてガイルを追いかけようとして、黒服の男に邪魔されたこと。

「……で、目が覚めたらオレはここにいたんだよ」

学校から帰って今までのことをそのまま話す。ただし、レイの兄の事は伏せて。

もしもガイルの言ったことがデタラメなら、レイに迷惑が掛かる。だからその件に関しては警察よりも先に自分で確認したかった。

「……そうか」

俊介の話を聞きながら手帳に何かを書き込んでいた父は、手帳をポケットにしまうと徐に立ち上がる。

「まずは署に戻ってガイルのことを確認してみよう。それからすぐに捜査に移る」

「オレも」

「駄目だ。まだロクに動くこともできない体で何が出来るって言うんだ？ 第一、学生のお前を捜査に参加させることなど出来るわけがないだろう」

「けどー」

「千里のことは俺に任せて、俊介はまず体を休めるんだ。いいな」

言い聞かせるように言われた言葉に、反論したい気持ちしか浮かばない。

だが、言われるまでもなく自分の体の状態は自分が一番よくわかっている。今も体を起こしていることができずに、ベッドの上に倒れたままだ。千里を捜すどころか、歩くことすらままならぬ。

「俊介」

「……わかったよ」

なら今は父の言う通り体を休めることが最善だ。最低でも歩くことさえできれば千里

を捜すことは出来る。

「それじゃあ母さん。俊介のことは頼んだよ」

「ええ。あなたも気をつけてね」

母に見送られて父が病室を後にする。

その後ろ姿を見送ってすぐ、俊介は張り詰めた気を緩めると同時に、瞼を動して眠りへと落ちていくのだった。

次に俊介が目を覚ました時には、沈んでいたはずの夕焼けが朝日となって再び空へと上ってきた頃だった。

カーテンから僅かに漏れた朝の陽射しが俊介の頬を打ち、その光から逃げるように寝返りを打った所で虚だった意識が覚醒を迎える。

「朝か……」

僅かに残るまどろみが頭の中から消えるよりも先に、俊介は体を起こした。

まだ少し体は重いが、動かせないほどではない。

「……歩けるならそれで十分だ」

ロクに起き上がることも出来なかった昨日に比べればそれでも上等だろう。布団をどけてベッドを抜け出す。床に足をつけた瞬間、体が僅かにふらついたが、倒れることはなかった。

「着替えは……これでいいか」

昨日倒れた間に着替えさせられていたパジャマの代わりに、ベッドの脇に置いてあった夏服に着替える。昨日俊介が着ていたものがそのまま置いてあったのだろう。白いカットシャツに鼻血の跡が残っていた。

「後は魔法が使えりゃ完璧なんだが……」

試しに手のひらの上で光の球が出現するイメージを浮かべてみる。

魔法というのは体内にある魔力を、使用者の想像に添う形で具現化するものだ。その魔力を体内に持っているのは、何故か世界中で日本人だけ。逆に言えば、体内に魔力があれば日本人でなくても魔法が使えるところなのだが、更にその逆を言えば日本人であっても魔力がなければ魔法が使えないと言っことになる。

本来であれば体力と同じく休息を取れば自然に回復するものなのだが……

「……やっぱ無理か」

いくらイメージを浮かべて魔法は発現しない。昨日の高位魔法のせいで、俊介の魔力は未だに戻っていないらしい。

以前のバトルロイヤルでは、終わった後三日間は魔法が使えなかった。あれから魔力の総量はまた上がっているだろうし、昨日は一方的に殴られていただけなので魔力の消費もバトルロイヤルの時よりは少ないはずだ。

「それでも、今日一日は使えないと思っただ方がよさそつだな」

本来ならおとなしくしておくべきだろう。

だが……

「あんな奴の所に千里をいさせてたまるかよ……ッ」

一分一秒でも早く、千里をガイルの手から救い出す。

その想いに突き動かされて、俊介はカーテンの向こうへと足を踏み出すと、そこには同じようにカーテンで区切られた部屋が三つ。俊介の分も含めた四人用の病室だったらしい。姿は見えないが人の気配を感じる。多分まだ寝ているんだろう。時計がないからわからないが、まだ朝も早い時間なのかもしれない。

「今のうちにさっさと出てくか……」

看護師辺りに見つかる病室に戻されるだろう。母が夜勤だった場合は確実だ。今の体の状態では振り切って逃げるなどできそうにない。

「見つからないように行かねえとな……」

体はだるく魔法は使えないが、幸いなことにそれ以外の感覚は完璧だ。むしろいつもより鋭敏と言ってもいい。目を使わなくても、気配と足音だけで人のいる場所、距離を正確に把握できそう。

「廊下には……誰もいない」

念のために病室の入り口から顔を少しだけ出して人の姿がないことを確認して、廊下へと出る。足音を出来るだけ立てないように歩いて階段で一階まで降りる。

「正面玄関は……開いてないだろうな」

正確な時間はわからないが、まだ病院内にほとんど人がいないことから見てまだ診療時間ではないのだろう。

「となると、夜間用の出入口か……確か玄関と反対の方にあったよな……」

健康優良児であり病院に縁のない俊介だが、母親が勤めていると言ったこともあって、何度が足を運んだことがあり、曖昧ではあるが間取りは把握している。さして迷うことなく、無事に病院を抜け出すことに成功した。

「さてと……」

病院を無事抜け出したものの、俊介は千里がどこに囚われているかなど知るよしもない。

かといって闇雲に探して見つかるほど日本という国は狭くない。

「手がかりは……二つあるか」

そう呟いて、俊介は空を見上げる。

空は青く染まっているものの、夏特有の刺すような陽射しは感じられない。ジメツとした暑さは感じるが、汗が流れるほどでもなく、吹き抜けていく風が涼しく感じられる。

「……先にあっちに行くか」

この時間ならまだ、学園は始まっていないはずだ。

「……レイに事情を聞くのは後回しだ」

「ここに来たのは……三ヶ月ぶりか」

俊介がやってきたのは町から出て、車の取る道路も歩行者の歩く歩道も整備されておらず、あるのは地肌の見えた獣道が続く郊外の森だった。

交通機関は使えず、魔法の使えない俊介の移動手段は自前の足しかなく、ここに来るまでに太陽は随分と高い所まで上っていた。

「また来るなんて、思ってもなかったのにな……」

俊介は森の中を更に奥へと進んでいく。目的地にはたった一度しか足を運んだことが

ないにもかかわらず、俊介の足取りに迷いはない。
生い茂る木々は影を作り、点々とした隙間に光が差し込む獣道を進んでいく。しばらく
歩くと、開けた広場のような場所が現れた。

その真ん中に……忘れもしない、ガイルの館があった。

三ヶ月前に俊介達が乗り込んだ時と何ら変わっていない。

一時期は警察が色々調べていたらしいが、今は誰一人そこにはいない。

すっかり人々から忘れ去られてしまったそれは、まるで廃墟のようだった。

「ここに来てくれりゃ、話は早いんだけどな……」

口にはしてみたものの、あまり期待はしていない。普通に考えて、この場所は俊介にも警察にもバレている。刑務所から脱獄したのでないなら警察は追ってこないにしても、俊介が来る事はわかりきっているはずだ。

一応念のために警戒しながら近づいてみるが……やはり人の気配はしない。

警戒を続けたまま、玄関の扉の方へと回り、静かに扉を開……こうとしたのだが、俊介の意志を無視して、扉はギィイという鈍い音を立てた。背筋が凍えるように冷たくなる。

もし万が一ここにガイルがいて、さっきの音で気付かれたとしたら、その瞬間に千里を助けるどころか自分が殺されていただろう。いくら俊介でも、今の状態でガイルを相手に戦えるとは思っていない。

……だがその心配はすぐに杞憂に終わった。

「ゲホッゲホッ……」

扉が開いた瞬間に吹き込んだ風によって埃が舞い上がり、陽の光を受けて俊介の視界にその姿を映し出す。

「ゲホッ……こいつは……」

口元を腕で押さえながら、館の中へと足を踏み入れてみたものの、どこもかしこも埃まみれで、とても人の住んでいる様子はない。主を無くして今までずっと放置されていたようだ。埃の溜まった床に、俊介以外の足跡が残されていない事からみても間違いないだろう。

「ハズレか……しょうがねえな」

ここには何の手がかりもない。

となれば……

「……しょうがねえか」

俊介に残された心当たりは一つ。

「あの野郎が言ったことが嘘か本当か……聞いてみればすぐにわかる、か」

ガイルの館を出た俊介は、一路学校へと足を向けた。

昨日ガイルが言った言葉、

レイの兄に世話になったという話。

アレが嘘か本当かはわからない。だが、今の俊介にはそれしか手がかりはない。

微かな希望に絶る一方で、僅かに嘘であって欲しいとも願っていた。

レイが今回の件に手を貸した……などとは思っていないが、もし事実だったなら……

間違ひなく自分は千里を助けるためにレイの兄の所へ行くだろう。その時、レイはどうするののか。

もしかしたら、またレイと戦うことになるかもしれない。

この前のような喧嘩で済むならいい。だが、もしもハッキリと敵味方に分かれるようなことになったら……

「……考えても仕方ねえか」

その時は……なるようにしかならないだろう。

「まずは確認してみないと」

校門の前で足を止めて校舎を見上げる。

教室の窓には授業を受けている生徒の姿が見える。今が何時間目かはわからないが、実技の授業でなければレイは教室にいるはずだ。

それを確認して、校門を潜って校舎の中へと入る。通りなれた順路を通って自分の教室へと辿り着くと、ガラツと言つ音を従えて扉を開ける。同時に、教室中の視線が一斉に自分を集まった。

「か、風見君!? どこに行っていたんだい? 君の親御さんから、連絡が……」

どうやらクラス担任の授業だったらしい。いつも通り腰の退けた話し方をする担任を無視して、俊介は真っ直ぐにレイの元へと歩いていく。

「てっきり休みだと思っていたが、重役出勤とはご大層な身分だな、シユン」

レイがいつもの調子で話しかけてくる。

……本人に悪気はないのだろうが、そのいつも通りの調子に少し苛ついた。

「……シユン」

「千里が攫われた。攫ったのはガイルだ」

「……何だと」

飄々とした笑みが消えて、驚いた様子を見せる。……少なくとも、演技をしている様子はない。

「それは何の冗談だ、シユン?」

「オレが冗談でんなこと言つと思つてんのかよ」

「……そうだな。しかし、あの男は刑務所に収監されていたはずだが……」

周りでクラスメイト達がザワザワと騒ぐ中、一人冷静にレイはそつ口にする。その様は、嘘をついているようには見えなかった。

そのことに少し安堵するものの、問題は何一つ解決していない。むしろここから本番だ。

「……あの野郎が言つには、お前の兄貴があいつを刑務所から出したってよ」

「兄上が、だと!? そんな馬鹿な……」

今度は本気で驚いた声を上げる。

「んなこと……できるわけねえよな」

レイがいわゆる上流階級というか名家というか、それなりに力を持った家系の人間であることはいい加減気付いている。

だからといって、刑務所に収監された犯罪者を出所させることなどできるはずがない。

……いや、していいはずがない。

罪を犯した人間を、個人の都合で許していいはずがない。そんなこと、出来ていいは

「…」

「だから、」

「なあ？」

笑って斬り捨てて欲しかった。できるわけないだろうと。

「…」

「兄上なら、可能だろうな」

帰ってきた答えは、俊介の期待を裏切るものだった。

「兄上なら……兄上の権力なら、それぐらいのことはできる。だが、何のため　ッ!?」

「どういうことだよ、それは」

頭で考えるよりも先に、レイの襟元を掴んでいた。

「あいつは千里を誘拐した犯罪者だぞ。そんな奴が、何で簡単に出てこられるんだよ」

「や、やめなさい、風見君。喧嘩は……」

「るせえ！ 黙ってる！ おい、レイ！ 何とか言えよ！」

レイの体を前後に揺さぶるが、レイはされるがままになって何も言わない。

……別にレイが悪いわけじゃないことはわかっている。レイがガイルを解放したわけじゃないことはわかっている。

けど、それならこの憤りはどこにぶつければいい。

ガイルは罪を犯した。

千里の両親を殺し、千里を誘拐して十年近くも監禁した。

そんな奴を裁くために、罰するためにルールがあるんじゃないのか！

それを個人の意志で曲げられるなんて、ふざけてる！

だから、否定して欲しかったのに……レイは何も言わない。

「……」

「わかった。もう言わねえよ」

失望にも似た気持ち胸の中に広がっていく。

「お前の兄貴はどこにいる？ 教えろ」

「……」

「それを知ってどうする？」

「決まってるんだろ！ 千里を助けに行くんだよ！」

苛立ち紛れにレイの机をバンと叩く。クラスメイト達の息を呑む音が聞こえた気がした。

「教えろ、レイ」

「……」

「悪いが、それはできない」

「なっ……」

返ってきたのはまたしても予想外の答え。

相手はレイの兄だ。一緒に千里を助けに来てくれるとは思わない。それでも、それを教えてくれるぐらいのことはしてくれると思っていた。

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「足手纏いだ」

「んだと……!?」

気付いた時には遅く、レイの手刀が俊介の延髄を打っていた。

「レイ……ダメエ……」

崩れ落ちていく意識の中で、俊介は最後までレイのことを睨み付けていた。

* * *

「レイッー」

時間を巻き戻すように、崩れ落ちた意識がゆっくりと現実に取り上げられてすぐ、俊介は勢いよく体を起こして自分を気絶させた相手を睨み付け……ようとして、正面に誰もいないことに気付いた。

「ここは……どこだよ」

気がつけばまたベッドの上で眠っていたらしい。しかも、今朝寝していたベッドよりも遙かに寝心地が良い。周りを見回して見るが、見覚えのない場所だ。学園の保健室でもない。今朝目覚めた病室でもない。

……いや鼻につく匂いからして病院であることは間違いなさそうだが、今朝の病室と違ってここにはベッドが俊介の眠っていた一つしかなかった。

「気がついたか。随分と長い間気絶していたな」

不意に声を掛けられて身構えるが、相手の姿を見てすぐに警戒をといた。

「健一か……驚かすな」

「俺は普通に座っていたただけだな」

中田健一。俊介のクラスメイトであり友人だ。

「……今随分長い間気絶してたって言ったよな？ 今何時だ？」

「外を見て見ろ」

言われるままに外を見てみれば、学園に着いた時は確かに青かったはずの空が、今は茜色に染まっている。

「お前の母親から事情は聞かせてもらった。……魔法も使えないらしいな。そんな有様で、どうやって風見妹を助けるつもりだったんだ？」

「うっせえ！ んなことどうだっていいだろ！ それよりレイの奴はどこにいったよ」

「あの後すぐに、直接兄に問い質してくると教室を出ていった」

「ならオレも」

「藤原も言ったが、今のお前では足手纏いにしかなるまい。そこにはあのガイルの他に、お前を叩きのめした男もいるのだから？ 魔法を使えない今のお前に何が出来る？」

「だからって」

「どちらにしろ、藤原の兄の居場所を知らないのだから？ なら今は、藤原を待つ以外にできることはな」

「それは……そうだけだよ」

健一の指摘はもっともで、確かに今の自分が言った所で足手まといにしかならないだろう。それに、応援に駆けつけようにも場所がわからない。闇雲に走り回って運良く見つけられる可能性なんて、ゼロに等しい。

「けど……」

「まあ、風見妹のことだからな。お前がムキになる気持ちはわからんでもない」

「……そりゃ、あいつは妹だからな」

「ここでごまかす必要はない」

「ごまかすって何だよ？」

「好きなんだろ？」

「ぶっ!? な、なななな、何をいきなり?! こゝこんな時に馬鹿言ってんじゃねえよ!」

「風見がそこまで狼狽えるのも珍しいな。それと、ごまかしたいならまず顔を隠した方がいい。赤いぞ」

「~~~~~ッ!!」

この非常時に何を寝ぼけたことを言っているのかと怒鳴りたい所なのだが、喉の中で言葉がこんがらがって出てこない。

「……それなら尚のこと、今無理をすべきじゃないだろう。伝えるべき言葉も伝えないまま死ぬ気が?」

「けど」

「自分を助けるためにお前が傷つくことを、風見妹は喜ばないはずだ」

「……それはあいつを助け出せたら、だろ?」

「藤原を信じられないか?」

レイは俊介の友人だ。もちろん、信じている。

だが……

「あの野郎を刑務所から出したのは、レイの兄貴だって話だぞ」

「藤原がやったことじゃない」

「んなことはわかってる! けど……わかってても納得のいかねえもんがあるんだよ!」

不安が募る。

せめて自分もレイと一緒に行けたなら、こんな思いをせずに済んだのに。

待つことしかできない今は、ただ、辛い。

「……ちくしょう」

そして……

「なんだってオレは、いつもあいつを守ってやれねえんだよ……」

こんなにも無力な自分が……悔しかった。